「性格のない人間」における身体の記号論的一考察

――R．ムシル[1]の小さな物語をめぐって――

大山智徳

はじめに

Robert Musil（1880-1942）はオーストリアの作家で、はじめは軍人を志すが、のちに機械技師など理工系の職を経た後、創作をはじめ、二十世紀を代表する未完の大作『特性のない男』で知られる。

本稿が取り上げる「性格のない人間」は、『生前の遺稿』の「序文」の「Ⅲ　物語とはいえない物語」の中に収録された短編小説である。一九二七年七月「フォス新聞」に初出、同年十一月に「デア・ターク」に掲載された。自分が短文を書くことへの不安を感じながらも『生前の遺稿』は一九三六年に出版された。出版されるとすぐ『生前の遺稿』はヘッセに絶賛された[2]にもかかわらず、「性格のない人間」についての日本語の論文は皆無である[3]。

この作品は、教養小説の形式を採用しつつ「性格のない人間」という主人公とはいえない主人公を創造することで文学という制度から新しい読みの可能性を拓くとともに人間の内面の表出・主人公の精神的成長という教養小説の制度に対し、規律＝訓練された身体を記述することで、教養小説という文学制度を一つの社会装置として浮き立たせ、作動させ、近代的な身体が廃棄される極めて明快ないわば、反転した教養小説である。

この奇妙な命名『生前の遺稿』という矛盾する言い回しは、読者に不思議な興味をわかせる。普通なら『遺稿』だけでよいのでないか。だがムシルはまだ生きている。だから「生前に書かれた遺稿」という意味であろう。だがどうして、生きている間に「遺稿」をわざわざ書かなければならなかったのか。どうやら精神的な葛藤が原因らしい[4]。

本稿はこの短編を、記号論をつかって分析し、近代的身体の限界を浮き彫りにすることを目指している。

現象学は近代的知性を問い詰め、その超克のため身体の作用に活

路を求めたが、その身体は主体性を担う身体であった。だから主人公が「決断する」時や「コミュニケーションを図る」時の身体は現象学で取り扱うことができる。だが「主体」とは近代的知性の一つの仮構ではないのか。一方で近代は、人間が大きな記号のシステムの中の没主体的な一つの項として、一つの記号としてしか生きてゆけない世界を作り出したと言えないか。人間疎外の境地である。短編「性格のない人間」は、こうした主体の言説への異議申し立て、いわば〈外〉の身体を語った作品である。筆者は、この作品の特性を記号論によって明らかにしたいと考えた。記号論こそがその〈外〉の身体をも記述可能とする、超越論的主体を虚構することなく、身体を語ることのできる可能性を秘めている、と考えるからである。それは同時に超越論的現象学を含んだ主体の現象学の不可能性をも射程にいれる可能性を示している。たしかに「フッサールの現象学が記号論、言語論等に大きな影響を与え」たと言われる。[5] だが記号論は、たんなる分析のための便宜的な手法、道具とするのでなく、近代の人間と世界の存在様式を受けとめると捉え返すとき、ムシルの描こうとした人間（〈外〉の身体としてしか存在しない）を語り出すための方法論となるであろう。

1　記号論の系譜

記号論とは、多くの誤解があるにもかかわらず、たんなる記号の体系についての議論ではない。記号（シーニュ）は記号表現（シニフィアン）ではなく、記号表現（シニフィアン）と記号内容（シニフィエ）の二項から成立している。つまり、表示する（現在分詞形としての）項と表示される（過去分詞としての）項と言い換えることもできる。かつてソシュールをはじめて日本に紹介した小林英夫は、記号の二項関係を言い表すために、前者を「能記」、後者を「所記」と訳した。[6] 記号論は、たんなる方法論ではなく、存在論と方法論との同一性を基礎にした方法論である。

現代記号論には三項関係によって、記号世界を捉え返そうとするパースからモリスへの系譜があるが、彼等の記号論では、「言語以前に存在する対象に、名前というレッテルを貼る『言語命名論』になる。[7]」。本稿では、前者の二項関係を提唱したソシュールが『一般言語学講義』[8]の中で提唱した2種類の差異でたりると考える。なお、二項関係の記号論の系譜は、ソシュールにはじまり、イェルムスレウにつづき、R．バルトはこれによって文化の体系を明るみに出した。これは、後述するように二項関係の組み合わせで無限の記号体系が可能であることを示す。

二項間の関係の特色は恣意性（差異）にある。わかりやすい例を

挙げよう。一つはシニフィアン（記号表現）とシニフィエ（記号内容）の結合の恣意性（差異）であり、もう一つはシーニュ（記号）同士の恣意性（差異）である。

一つ目の差異は「イヌ」という音（＝シニフィアン）が「犬」（＝シニフィエ）という「概念」と結びついて初めて「犬」（＝シーニュ）という記号が誕生するが、この場合、「ドッグ」という音でも「犬」という「概念」で「犬」（＝シーニュ）を表すことでわかる。

二つ目の差異である記号間の差異はシーニュとしての「犬」は「ネコ」「ライオン」「トラ」・・・とは違うという意味（差異）で初めて「犬」が措定されるという意味である。

重要なことは、シニフィエは実在（デカルト的延長）ではないということである。シニフィエは概念であり、意味である。だがそのシニフィエを介して、実在を狙っている（志向している）ことは確かである。シニフィアン「イヌ」はシニフィエ「犬の概念」を介して、実在の犬に至る。この革命性は言語の中にすべての記号が指示対象に従属するという記号観から意味を記号内部に回収するという記号観へ転換される。ある対象がまずあって、それを名付けるのではなくて、言語によってはじめてある何かが生まれ、意味づけられるとするのである。[9]

ここでは、言語は記号の基礎となっており、言語学⊂記号論（言語学は記号論の一部である。）という関係になっている。

さて、ソシュールの言語論的革命後、イェルムスレウが芸術にとって重要なコノテーションという概念を打ち立てる。[10] イェルムスレウはソシュールの記号観を発展させ、記号の「表現面が記号体系である記号体系、及びその内容面が記号体系である記号体系であって、前者を内包的記号体系（Connotative semiotic）、後者を超記号体系（Metasemiotic）」（p.96.）と呼ぶことを提唱する。ここで言う「表現面」とはソシュールに即して言えば、シニフィアンであり、「内容面」はシニフィエである。そして、「内包的記号体系」と「超記号体系」とはそれぞれ、後にR．バルトが図式化した「コノテーション」と「メタ言語」と呼ばれることとなる記号形式である。

R．バルトは、表現面をE、内容面をCとし、この両者を繋ぐ関係をRとして、ERCという記号形式を取り上げた。このERCはデノテーションであり、意味作用を構成する一次的記号形式となる。彼はその著書『モードの体系』[11]の中で展開されるERCの中で、このERCを一つの表現面、すなわち、Eとなっている記号を指摘し、次のように表記する。

｛（ERC）RC｝

ERC、すなわちデノテーションを一次的記号関係と見なし、この二次的記号関係をコノテーションと呼ぶ。これはイェルムスレウの「内包的記号体系」である。

さらに｛ER（ERC）｝も考えられる。これがメタ言語である。こ

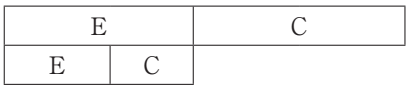
れはイェルムスレウの「超記号体系」である。

バルトはこれを再び、ソシュールのシニフィアンとシニフィエに置き換え、次のような場合をそれぞれコノテーション、メタ言語と表現した[12]。

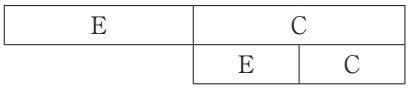
なお、デノテーションはコノテーションやメタ言語の下部に位置することとなり、RはR．バルトの概念図式では位置構造によって表現されている。

〈デノテーション〉

〈コノテーション〉



〈メタ言語〉



ちなみにイェルムスレウの「内包的記号体系」と「超記号体系」はそれぞれ、R．バルトのいうコノテーションとメタ言語と同じ記号形式である。記号論で芸術作品を考えるとしばしばコノテーションがより重要な記号形式に思えるが実は、鑑賞者や学者の言説はこの二次的記号関係にあるコノテーションを内容面とする三次的記号関係であるメタ言語が思いのほか、より重要であることに気づくだろう。

さらに、R．バルトは言語と記号の関係を転倒させる。記号論⊂言語学（記号論が言語学の一部である。）だと主張するのである[13]。

記号論の方こそ、言語学の一部だと述べるのである。この逆転は、何を意味するか。記号は言語によって基礎付けられるというのである。この逆転によって、言語論的転回、すなわち、言語を基礎におくことにより、方法論的に自我意識からスタートするという主体の言説から解放され、さらに言えば、言語に〈外〉は存在しないという命題が成立する。

一方、パースからモリス等の系譜の記号論は記号をシニフィアン＋シニフィエ＋指示対象の三項を記号としているが、二項の入れ子状であるコノテーションを想定すればほぼ同じ構造を備えていることになる。ただし、指示対象をはじめから想定する三項関係の記号観とデノテーションからコノテーションへと生成する二項関係の記号観は異質な原理に基づいている。

ここで、デュシャンの「泉」を考えてみよう。

シニフィアンは「イズミ」であり、そのシニフィアンによって、自然の泉あるいは森林の中の泉に壺を担いで立つニンフを描いたア

ングルの「泉」（シニフィエ）を想起する。アングルの場合、表題「泉」（シニフィアン）と泉の化身としての少女（シニフィエ）との間には、視覚化という美的連想の過程でつなげられていて、われわれはシニフィアンからシニフィエへの移行を素直にはたしている。だが、デュシャンのこの移行は、無残に裏切られる。呈示されているのは工業製品としての便器だけなのだ。シニフィエ「泉」は、現実に裏切られてイメージの中で宙吊りされている。しかもシニフィエ「泉」の他に、われわれは実物の便器からシニフィエ「便器」を導き出し、そこからシニフィアン「ベンキ」を呼び起こしている（レディ・メイドには、「ベンキ」という呼称があたえられている。）「デュシャンが出してきたのは「イズミ」と言うから、俺はすっかりアングルの「泉」（シニフィアン）のような作品を出してくると思ったよ。ところがよりによって清純さと真反対の不浄の「物」（シニフィエ）ではないか。俺たちが「ベンキ」（シニフィアン）とよんでいるアレさ。面食らったし、芸術を冒涜しているよ。」との議論が交わされたことは間違いない。この作品はシニフィアンとシニフィエの強固な結びつきを解体させる。

ちなみに、出品を拒否された「泉」はすぐ行方不明となり、あとにはステーグリッツの撮った写真がその存在のあり方を示している。このことは、自身は制作のために当時発明された写真を利用しながら、フランス政府に「画家の生活を脅かす」という理由で写真の禁止を要望したアングルの「泉」が底本になっていることは、どこまでデュシャンが意図していたかわからないが、皮肉としか言いようがない。

もう一つ、例を挙げておこう。ベルギー・シュルレアリズムの画家ルネ・マグリットは、実在と像（イメージ）の連続と差異を問いつづけた画家であったが、「これはパイプではない」という作品は、シニフィアンとシニフィエの関係の新しい局面を呈示している。作品には、まるでタバコ屋のチラシか広告のようなパイプの絵が横向きに描かれている。われわれは「パイプが描かれている」と思い、その写実性のゆえに実在のパイプにすぐ思いを馳せる。だから「これはパイプでない」という、描かれたパイプの下の一文を見ると、一瞬ぎょっとする。

次に「作品」がシニフィアンではない。作品の中に描かれた「パイプ」の形と色がシニフィアンである。「これはパイプでない」は、絵は「描かれたパイプ」（シニフィエ）ではなく、どこまでも「描かれたパイプの表象」（シニフィアン）であるという自明さを確認しているのである。だがこの像（表象）の否定辞を介して、自分が愛用している実在のパイプ（シニフィエ）に繋がろうとしている。ne…pas の否定辞がシニフィアンとシニフィエの差異を介しての繋がりを強調している。

2 記号論の身体への応用

さて、ここで、シニフィアンとシニフィエとの間の三種類の関係を提起してみたい。

はじめは旧約聖書の創世記「光あれと言われた。すると光ができた。」[14]に見られるような一方向の関係である。「光あれ」（シニフィアン）が言われ、「光ができた。」（シニフィエ）の関係を非対称で不可逆的で一方的に指し示す関係とみなし、これを固記号と呼ぼう。次に現象学（フッサール）『イデーンⅠ―Ⅱ』で述べられているノエシス／ノエマの関係である。双方はお互いに交流し、強固に結びついている。[15]これを閉記号と呼ぼう。これはシニフィアンとシニフィエの2種類の差異性を原理とする記号論では極めて特異な記号形態といえよう。

最後に二項関係の記号論、ソシュールからイェルムスレウ、そしてR．バルトへと連なるシニフィアンとシニフィエの関係は恣意的であり、すなわち、切断・接続される。[16]これを開記号と呼ぼう。

もう少し、筆者なりにすっきりさせて記号の三様相として形式化を図る。

EをSA(シニフィアン)、CをSE(シニフィエ)とし、デノテーションをD、メタ言語をMで表す。これらの関係を一方向の場合は「→」で、双方向交流の場合は「⇕」で、切断・接続関係を「／」で表し、これらの記号関係を記号の三様相とし、以下のように定式化をしておこう。

〈記号の三様相[17]〉

固記号：SA→SE

閉記号：SA⇕SE

開記号：SA／SE

これを本稿で重要となるすでに述べたメタ言語（M）の記号に適用すると次のようになる。

固記号：MSA→MSE、DSA→DSE

閉記号：MSA⇕MSE、DSA⇕DSE

開記号：MSA／MSE、DSA／DSE

ところで、この開記号を説明しようとすると奇妙な困難に遭遇する。開記号は構造自体に他記号を内包している。つまり、自記号と他記号の分離が不可能なのである。ところが、近代の言説は主客分離を前提とし、個体主義をとっているため、どうしても一つの記号の構造から説明することとなる。方法論的個体主義である。この方法で開記号を記述しようとすると構造上、他記号と分離不能な開記号をある一つの開記号があると仮定し、その記述からスタートするということになる。どうもこれが対象というSEと記述というSA

のミスマッチという奇妙な感じを与えるようだ。歴史的に形成された言説の重みを考慮すると安易な価値判断は禁物だが、個体というカテゴリーは近代という言説制度が構成した、あるいは要請した大いなるフィクション、つまり偉大な言説制度の一つにすぎないのではないだろうか。そして、主客分離という一つの記号関係を構成したのも近代の特徴であろう。開記号という概念は近代という言説空間を突破する概念ではなかろうか。

さて、もう少し、記号論について述べておこう。身体を心身二元論の祖デカルトのコギトにならい、精神と肉体から構成されるとしておこう。さらに、精神をシニフィアンに、肉体をシニフィエとしておこう。さらに簡略化してシニフィアンをSAとし、シニフィエをSEとしよう。

身体＝精神＋肉体という一つの記号とみなすのである[18]。

先に述べた固記号、閉記号、開記号をそれぞれの身体に当てはめて固記号の身体を受動身体、閉記号の身体を能動身体、開記号の身体を差異身体と呼ぶことにする。

さて、この身体に記号の三様相を適用し、形式化すると次のようになる。

〈身体の三様相[19]〉

受動身体：MSA → MSE、DSA → DSE

能動身体：MSA ⇔ MSE、DSA ⇔ DSE

差異身体：MSA ／ MSE、DSA ／ DSE

この中で、閉記号はDSAとDSEが豊かに交流し、MSAとMSEとが豊かに交流する身体である。MSA ＝ DSAの時、近代的自我である。これが近代の身体である。

近代の身体：MSA ⇔ MSE、DSA ⇔ DSE、MSA ＝ DSA[20]

3　作品分析[21]

さて、ムシルの短編「性格のない人間」についての分析を行おう。主題は「性格」であり、表題のように、「性格のない人間」を主人公として、性格が普通考えられているように生得のものでなく、社会的な虚構であることを明らかにしようとする。

物語は次の一文からはじまる。

今日では、性格のある人間を捜そうと思えば、（今では時代遅れになった感のある）カンテラででも照らしてかからねばならないだろう。その上、昼日中灯りをともして徘徊などすれば、多分笑い草になるのがおちであろう。そこでぼくは、自分の性格のことで苦しんでいた、平たく言えば、そもそも性格など持ち合わせていなかった一人の男の物語をしてみようと思う。しかし今になると、私がその男の意義を私たちの生きた時代に合

わせて理解していなかったことを悔やみ、最終的にはかれが時代の開拓者や先駆者のような存在ではなかったのかと心配している。

この短編は、ドイツ伝統の教養小説のジャンルに属し、①少年時代、②思春期、③青年期、④壮年期と進んでゆく。その順序を追って考えてゆこう。

①少年時代（pp.14下20―117上8）

その男は、あまり口にはしたくないような、くだらない些細ないたずらをしては、母親の嘆息の絶えることがなかった。母親の手に負えないときは、会計検査官であった父親が棒でお仕置きをしたものである。だが、そのお仕置きといっても、料理女が衣服の埃を払うためにつかうような棒で、一種の折檻の儀式のようなものであり、折檻が終われば父親に感謝して、詫びればそれですむ話だった。だがかれはぶたれている間泣き叫び、折檻が終わった後は痛みの跡を消そうとした。両親は手を焼き、「性格のかけらもない」と嘆いた。性格が悪い、という意味だ。

少年時代には、性格とは、それを人が具えていないにも拘わらず、その名において折檻される代物のことだった。（p.115）

ここでのストーリーポイントは「性格は親の体罰によって形成される。」という点である。この節は一つの平面（＝原身体＝原境界）を外（＝親の体罰）の力によって閉じた空間（＝身体＝境界）にすることの記述である。したがって、もともと空間には一枚の平面としての身体が存在するに過ぎず、とりあえず、閉じた空間を構成したものの、閉じた空間の内側に必ずしも内面が無条件に成立するわけではなく、形態として閉じているだけということになる。

ここでは通常とは異なり、親の体罰としてMSAが誕生し、DSAが強制的に作られることが要請される。

ここでの身体は受動身体、MSA→MSEである。

②思春期（pp.117上9―118下13）

ドイツ舞台で演じられる性格の、そのいっさいを身につけたのだった。（p.117）

小説の中には、無数の人生の状況に対しての、きわめて驚くべき態度の在り方が、書いてあるが、・・・予見されている人生状況とは、一度として完全に一致しないことである。（p.117）

自分に固有の性格を・・・探しはじめたのであった。（p.118）

ここでのストーリーポイントは「ドイツの舞台上で演じられる演劇上の性格をすべて身につけたが、それでは不完全であり、固有の性格を身につけようと考えたこと」である。

ちなみに「性格」と訳されたCharakterは、演劇では「登場人物」という意味でもあり、主人公は、読書好きであったのだろう、ドイツの舞台で演じられるシェイクスピアやラシーヌやモリエールやシラーやゲーテらを読み込んでは、その登場人物になりきろうとしたのである。

前節の空間は、外から形成された空虚な内と境界と外の空間であったが、本節では、外から形成された空虚な内は外から付与された無数の性格で埋められる。境界としての身体は他者のまなざしを見事に撥ねかえすことに成功する。しかし、ここでも、内の身体は固有の性格という中心を持たない。言い換えるならばここでの身体は近代社会の自我をSAとする主体の中心原理である「唯一の性格」を持たない。いわば、身体の曲率が一様ではないのである。前節での外から強制される身体は「空虚な中心のない身体」であった。この節での身体は、「中心が多様な身体」である。しかし、ここでも日常生活世界の社会的な行為の記述の単位であるはずの「自我をもった身体」とは異なる。

過剰なDSAのように見えるが、実はこれらはすでにある身体技法の模倣であり、ここには自由な選択による身体技法は存在しない。

ここではドイツ演劇のすべての性格がMSAであり、MSA→MSEとなり、ここでの身体も受動身体である。

③青年期（pp.118下14—120上19）

数年後に再会したとき、彼の職業は弁護士であった。（p.118）

「職業上の性格！」と私が言った。友はこの言葉に満足だった。（p.119）

「あれはまだ、思春期のことであった。」（p.119）

さいわい、おれには婚約者がいてね、こいつは、おれのことを、全然性格のない男だと言い張るんだ。（p.119）

彼が大人物になろうとは、誰一人本気で考えなかった。（p.120）

この節のストーリーポイントは「弁護士になった主人公は相変わらず、固有の性格を持ってはいなかったが、愛すべき人物となっていた。」というところである。

弁護士とは規範の境界に携わる職業である。性格の不在を嘆いた

この一人の男はいつの間にか規範と内面（＝性格）を措定する職業についていた。

婚約者をはじめ、「観察者の視線」に遭遇した主人公の身体は、「他者」により多様な意味を加えられた「過剰に意味付与された身体」として生成することとなる。これは、「解釈され続ける身体」とでも言える身体である。「職業上の性格」の前では「唯一の性格」は無力であることを学んだのである。主人公は自分の「解釈され続ける身体」の無数の解釈、過剰な意味付与に耐えられない。この節の身体は他者により無数に解釈される身体であり、閉じた境界は外の無数の力によって変形させられている。性格は自己形成するものでもなく、自己言及するものでもなく、他者の解釈という権力によって一方的に名づけられる非対称な身体は近代社会という社会を逆に照射する。「他者の解釈」による「身体」の複数化と「自我」を獲得しようとして無駄に終わった努力、「固有の性格の欠如」による「一つの自我に統制される身体」の解体。他者のまなざしに規定され、さまざまに曲げられる空間も出現している。

唯一の性格を持たない身体は、解釈される身体になることによって、無数の境界＝身体を持つ中心なき身体となる。

ここでも、MSA→MSEで、DSA不在である。ここでも受動身体である。

④壮年期（pp.120上20―121下6）

高名で勢力のある地位に収まっていた。どうしてそうなったかわからないが、私の推測では、その謎のすべては、彼が肥満した点にあったようだ。（p.120）

「わたしの確信によれば、性格の発達は、戦争と関係があるんだ、」・・・「だから。われわれが、今日必要とするのは性格ではなくて、規律＝訓練[22]さー」（p.121）

どうやら彼は、できるものなら欣然として、一度ならず窓枠に、手をかけただろう、ということである、だが、ある何かが、彼にそれをさまたげたのだった。（p.121）

ストーリーポイントは「肥満した身体は主人公に社会的成功をもたらした。そして、性格は戦争と関係があり、今日必要なのは性格より規律＝訓練であることに気づく」という点である。ここでの性格とは、「空虚な内」に替わって、「社会的属性」へと個人に分与された演技的身体の原理のことであり、それが方法論的個人主義により生得のものとして記述されるがゆえに、近代の一つの虚構であり、戦争のための身体とは無関係ではない。ここでの戦争はまさに社会的装置の究極の作動のことであろう。武器の発達した「今日に

おいて必要なのは個々に分節された自我を持った身体ではなく、規律＝訓練によって空虚な内面を具えるよう編制された身体である」。つまり、今日においては、規律という個々の身体を編成する〈外〉からの権力が必要だということである。こうしてこの物語は、〈外〉からの権力論となる。主人公は肥満することで、「社会的身体」として他者から、たとえ正しい解釈でなくとも、承認されることに成功したのである。主人公の肥満という肉体は社会と精神の接点としては存在するわけでない。むしろ、彼の肉体は彼の空虚な内部を隠すために存在する。それは彼の「性格の欠如」という特性を社会から隠すことに成功した。彼の身体は「近代市民社会の最小単位たる自己決定可能な身体（＝近代の身体）」ではなく、「社会的身体」として成熟しなかった。主人公の身体は近代社会の構成原理とは異なった原理を有しており、いわば、近代社会を構成する原理の〈外〉に位置する。主人公の身体は近代社会を編制する「自我」の原理の〈外〉に存在する身体である。

肥満し、内が不可視になることで逆に内面が外となり、これまでの〈内／外〉と反対の非対称な関係が成立した。つまり、これまで主人公を一方的に名指してきた日常生活世界が今度は主人公に一方的に名づけられる内となったのである。その瞬間、全体集合としての世界は〈内／外〉の反転した世界となる。日常生活世界は主人公の性格（＝DSA）の部分集合になったのである。Dを規定するMSAがDSAと一致した瞬間である。〈内／外〉の関係は反転したものの「非対称で一方向」の記号関係は依然として続いている。精神と肉体の双方向交流はまだ見られない。近代の身体はMSA ⇧ MSE、DSA ⇧ DSE、MSA ＝ DSAであった。この「⇧」が成立していないのである。彼は観察者として生成したのである。〈内／外〉の入れ替わったMSA ↓ MSEの身体である。

さらに考えるとこの物語は一貫して「性格」は生得的という思想を排除し続けてきた。むしろ近代の、生得的性格が身体を構成することを注意深く拒否し続けてきた。その意味で、この物語は近代の身体の誕生を拒否する物語である。

いな、むしろ、積極的に近代に芽生えつつあった内面＝性格を〈外〉からまなざしを向け続け、権力（あるいは暴力）を行使し、まるで近代的な自我などない方が「戦争には都合がよい。」と考えていたかのようだ。

ムシルのこのシニカルなまなざしが近代の身体の仮構性を暴いている。さらに言えば、近代の身体という見果てぬ夢を自明視させる装置を一度ストップさせ、この装置の存在を読者に気づかせることこそが「性格のない人間」の意義であることは確かである。ヘッセの絶賛「鋭い観察、そしてきわめて正確な表現を獲得しようとするたゆまない格闘から生まれた傑作、ものごとをイロニーとペシミズムで観察している傑作[23]」だとすれば、この小品は近代の身体の誕生

前に再度、身体を受動身体へと帰すことで戦争が可能になることを言い当てた作品といってよいであろう。

4 近代の〈外〉の身体

この小品は一貫して近代的身体の壊死が物語られているのである。

さて、この小品には開記号の身体（差異身体）が二カ所現れる。記号論の性能が試されるのはこの差異身体をうまく説明できるか否かにかかっている。もっとも近代的で洗練された言説が現象学的言説（の秩序）と考えられるが、この差異身体は非常に扱いにくい箇所だと考えられる。なぜなら、この身体をエポケーして記述するとしてもその身体には内面という中心はないためにその身体の内面へ遡及することは不可能だと考えられるからである。仮に主体性の現象学でこの身体を解釈しようとすると最終的にはムシルの製作意図の再構成へと行き着くのではないだろうか。しかし、こうした方法＝制度をムシルが望んでいたかどうかは不明である。むしろ、作者の意図の再構成は近代のもたらした近代的な言説制度なのだからこの言説制度の限界を示した文学作品だと位置づけたほうがより生産的ではないだろうか。

まず、身体技法が解体する箇所をみてみよう。

第一は「思春期」における身体の記述である。

彼がいわゆる人生状況に直面するその度毎に…（略）…彼の身内で煮えたぎる、つまりは彼の口の端、上と下とへ同時にひきつり、ひたいには陰気な皺を浮かべ、同時にそれは輝き秀で、眼差しときたら、時を同じくして、咎めるように飛び出すかと思えば、恥じいりながら後退する、これは何とも不快なことだ、なぜなら人は、いわば自分に敵対して、わが身に苦痛を与えるのだから。結果としては、その時しばしば、あの周知のひきつりが、しゃっくりが起こる、それは唇、眼や手、喉に波及し、いやいや、時にはきわめて激しく、全身を襲い、ために身体は、雌ネジのないネジさながらに、きりきり舞を演ずるのである。（P.118）

状況の中で何かを「決断」するとき、身体が精神のコントロールを失った肉体として出現する。これこそ、差異身体である。この身体を主体性の現象学で記述するのは難しい。

次は「青年期」の記述である。

彼が話し出すとたちまち、その身体のあらゆる部分が、所を変えることだった、すなわち、眼は脇へそれ、肩や腕や手は、反

対の方向へ動き、少なくとも片方の足は、膝頭のところで、手紙を量る秤のように、はずむのだった。（P.120）

主人公が他者と「話し」をし始めようとすると彼の身体は統制を失い、それぞれの部位が勝手に動き始める。身体が開記号になったわけである。「話す」という他者との関係は自我を持った身体、閉記号の身体ではなく、開記号の身体になって初めて可能だと言わんばかりである。ここには、精神と肉体が切断され、宙づり状態の身体が出現している。「決断」とか「意図」というかたちの近代的自我を必要とし、しかもその自我によってコントロールから逃れる、いわば、中心のない身体であり、同時に秩序もない身体である。この奇妙な身体の記述は差異身体を表している。そして、この身体は主人公が「決断を必要とする時」と「コミュニケーションを図る時」に出現する。

いずれも内面の基準を必要とする局面である。いわば、「近代的な自我」という要素を構成要件とする局面で出現する身体である。ここには、MSA = DSA を中心とする言説の秩序はない。

おわりに

M という記号形式を適用し、分析すると、この小品は他者から一方向に規定される受動身体からそのベクトルを反転させたところに成立する身体の物語であると言える。このことは近代的な身体の最も重要な「自我」によって構成される近代的な身体という概念が極めて強い条件によって成立する概念であることも示している。

また、記号形式 M は、不可視の MSA という空間の存在とそこからの作用にも気づかせてくれる。

まさに、記号形式 M は作動したのである。

この小品には身体論のみならず、記号論やトポロジーのアイディアがふんだんにつまっており、近代の身体を語るには現在もっとも有効な言説としての主体の現象学を相対化する可能性さえ秘めている。今後も身体にはさまざまな権力関係が交差しているという問題意識を持続させながら、同時に文学作品と接続させ、記号論の作動する様子を観察していくこととし、本稿をひとまず終える。

註

（1）Musil の日本語表記について、論文から日本語表記を遡ってみると Musil としたものからムシル、ムジール、現在ではムージルと様々である。本稿ではムシルがチェコの家系であり、チェコ語の発音に沿うとムシルであるため、この表記を選択した。

（2）斎藤松三郎の「解説」『ムージル著作集　第八巻　熱狂家たち／生前の遺稿（1996）』松籟社．p.334 による。

（3）Cinii で 2008.10 末日で検索したが、ムシルについての日本語の論文は 155 編あるが、この時点では "Ein Mensch ohne Charakter" を主題

とした論文はない。また、日本独文学会編『ドイツ文学 79』(1987)ではムシルの「書誌」(pp.192-213)をまとめてある。編者は赤司栄一郎と早坂七緒。「付記」として、「日本独文学会編『寄贈文献目録』」、国立国会図書館編『雑誌記事索引』、日外アソシエーツ『雑誌記事索引―人文・社会編』を主な資料としました。」とあるが、"*Ein Mensch ohne Charakter*"を収録してある「C 個別作品研究」の「C―＜j＞Nachlaß zu Lebzeiten」(p.205)の項目はあるが、文献は空白となっている。

(4) 斎藤前掲書 pp.333-334. による。

(5) 金田晉,1973,「〈現象学運動〉の展開」p.144『現代思想 創刊号』青土社.

(6) Saussure, F, 1949, *Cours de Linguistique generale*, *Charles* Bally et Albert Sechehaye,=(1972, 小林英夫訳,『一般言語学講義』岩波書店.)の pp.160-165. 参照のこと。
また、丸山圭三郎,1981,『ソシュールの思想』岩波書店. ではより明確に述べてある。

(7) 亘明志,2004,『記号論と社会学』ハーベスト社 .p.40 で指摘されている。

(8) (6) 参照のこと。

(9) この帰結が言語論的転回の基礎であり、社会構築主義の源流である。ただ、このあたりはまだ、議論の余地があるようで、宮坂和男,2006,『哲学と言語 フッサール現象学と現代の言語哲学』ナカニシヤ出版によるとフェレスダールのノエマ解釈を「ノエマ=(言語的)意味=内在」p.38 とし、これを「西海岸解釈」p.38 と呼び、A. グールヴィッチ、ソコロフスキー、ドラモンド、ハート、カブ=スティーヴンスらを「東海岸解釈」と呼び、「「ノエマ」を実在する対象そのものとみなす」p.38 グループとしている。宮坂はこれらを詳述しながら「まことに理解しにくいことであるが、「ノエマ」はこの双方の意味を兼ね備えており、フッサール自身においてもおそらく決着がついていないのである。」p.46 となかば「ノエマ」の意味の確定を避けている。

(10) Hjelmslev, L., 1943, *Omkring sprogteoriens grundlaggelse*, K φ benhaven Munksaard (=1953, Whitfield, *Prolegomena to a theory of language*, Indiana University publications in anthropology and linguistics.Memoir 7 of the International Jpurnal of American Linguistics,Supplement to Vol.19, NO.1.1953, pp.iv+92)) =1959, 林栄一訳,『英語学ライブラリー (41) 言語学序説』研究社.
なお、「訳述者の言葉」として「原著と英訳とは若干相違している箇所があるが、これは原著者と英訳者との協議によったもので、むしろ、英訳の方が改訂版といった格好になっている。」とのことである。

(11) Barthes,Roland. 1967. Syteme de la Mode. Seuil. = 1972. 佐藤信夫訳『モードの体系』, みすず書房.

(12) 前掲書 pp.46-47. 参照のこと。

(13) 前掲書の「おそらくはソスュールの公式をひっくりかえして、記号学とそ言語学の一部分なのだ、と認めなければならないだろう。」pp.7-8. 及び日下部吉信,2005,「第2章 言語」pp.27-32『ギリシア哲学と主観性 初期ギリシア哲学研究』法政大学出版局において、「ことばが本来記号どうしの差異の体系ないし構造でしかないことはソシュールによって見出された現代哲学のもっとも重要な発見である(ソシュール『一般言語学原理』参照)。」p.27 とか「差異のみがあるのであって、差異が構造をなしているのである。差異に先立って何らかの意味対象が前提されているのではない。換言すれば、意味対象がすでにあって、それらが互いに異なるのではない。」p.28 と述べている。

(14) 『聖書の世界 第1巻 旧約I』講談社(1970) p.27. 参照のこと。

(15) Edmund Husserl, 1950, *Iden zu einer reinen phänomenologie und phänomenologischen philosophie* 渡辺二郎訳,1984,『イデーン I―II』みすず書房を参照のこと。ここでは、ノエシス/ノエマの強い関係性が述べてある。記号関係で言えば、シニフィアン/シニフィエの関係が双方向交流しているのと同型である。

(16) 開記号はSAとSEが自由に切断され、接続する関係を二項関係により成立する記号として捉えようとするため、複雑な記述となる。近代の〈内〉で語るには必要な作業と思われる。もし、そうでなければ、記号論を使う必要はない。詳細は後述。

(17) 大山智徳,1999,「身体の思想と表現―闘う身体・記号論・芸術学的可能性―」『芸術研究』第12号、広島芸術学会: pp.59-65. を今回、より

美しくまた、簡潔にするためにコンパクトにまとめた。

(18) この身体モデル、身体＝精神＋肉体なのかという問いが浮かぶかも知れないし、多くの議論の余地があると思われるが、本稿では身体モデルの構成上、論理整合的に要請される一つのモデルにすぎないことを述べておく。

(19) 本稿では記号の三様相をそのまま形式的に身体に適用しようと試みた。誤解のないように付言すれば、これは一つの公理である。公理は演繹のスタート地点であるから数学では恣意的でかまわない。そして、本稿の議論も演繹的に身体モデルを措定した。ただ、本稿では社会的現実から乖離したモデルは無効と思われるので、まず、近代の身体観の祖であるデカルトの身体モデルとの接続をはかり、比較的現実的なモデル化を試みたのである。そのため、異なった公理で身体観を定位すれば異なった系、つまり異なった言説が生まれることとなるのは必然であることを筆者は十分理解している。仮に本稿にわかりにくさがあるとすれば、演繹という方法を断りなく、芸術学の言説に持ち込んだことであろう。

(20) 第98回日本社会分析学会（1999）において、「『性格のない人間』―R. ムージルの短い物語をめぐって」という発表を行い、その時は「MSA ＝ DSA ＝自我」としていたが、三隅一人先生より「MSA ＝ DSA の時、自我なのではないか」とのご指摘を受けた。その後、「MSA ＝ DSA」を自我の構成要件の一つとした。

(21) 原文は Robert, Musil. 1995, *Ein Mensch ohne Charakter*. :Nachlaß zu Lebzeiten. rororo. SS.107-11. を使用し、訳は佐々木基一編　森田弘訳1968,「性格のない人間」pp.114-121『現代人の思想　5　文学の創造』平凡社. を使用した。また、斉藤松三郎訳1996,「性格のない人間」、pp.86-93 及び「解題」,pp.333-347,『ムージル著作集　第八巻　熱狂家たち／生前の遺稿』松籟社. を参考にした。

なお、丸数字とその表題は原文の改行に伴う空白により筆者が設けたものである。

(22) 原文は"Diszipliin"であり、森田訳では「訓練」、齋藤訳では「規律」と訳されているが、M. フーコーを経た私たちには「規律＝訓練」という訳語が最適と思われ、このように訳した。

(23) 斎藤松三郎の「解説」『ムージル著作集　第八巻　熱狂家たち／生前の遺稿』松籟社. p.334 の引用文。

（おおやま・とものり　郵便事業株式会社広島支店）

（金田晉教授より非常に丁寧なご指導を賜ったことに厚くお礼申し上げます。）